砂航蟲

紅翼龍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
砂航蟲

【Ｎコード】
Ｎ５７０１Ｂ

【作者名】
紅翼龍

【あらすじ】
戦争によって荒れた世界。平和になりかけた世界。大半は砂漠となった世界。少しずつ森と海が戻って来ている世界。そんな世界で、また、戦争が始まろうとしていた。

プロローグ（前書き）

はじめまして。プロローグはかなり短く、しかも稚拙ですが頑張って書いていこうと思いますのでよろしくお願いします。

プロローグ

突然、警報が鳴った。
それと同時に、異様な震動が基地全体を揺らす。テーブルの上に乗っていたコップは床に落ち、会議中だった幹部達は椅子ごと床へ倒れこんだ。何人かは何処かを打ったのか、身体を丸め込みながら苦痛の声を上げる。
「な、何だいったい？」
比較的無事な一人が言った。
「地震か？」
「ここは空中だぞ。何かよからぬ事態が起こったのだろう」
震動は続き、まだ止みそうにない。床や壁が軋む。
とその時、スピーカーが音を発した。
『緊急事態発生。緊急事態発生。実験中の個体、ＮＯ．１１２が暴走。第二、第三、第五機関区及びＡ－１区からＥ－８４区までが破壊されました。危険ですので、非戦闘員は速やかに退避してください』
一瞬、会議室の中が静寂に包まれた。皆一様にその事が信じられなかったのだ。
「なっ……バカなっ！　暴走だと！？」
「あのプロトタイプか！　拘束具はどうしたんだ！」
「捕獲隊は？　あれを逃がせば大変な事になるぞ！」
幹部達の叫びはそう長くは続かなかった。会議室はまもなく文字通り、潰れた。中にいる者達もろとも。
その者達は、命の最後の瞬間に一つの咆哮を聞いた。
その者達はそれに恐怖し、しかし何もできないまま死を迎えた。

その日、空に浮かぶ巨大な基地が一つ、消えた。そして、世界はその出来事をきっかけに冷戦から後に『大破壊』と呼ばれる戦争へ突入していくことになる。

プロローグ（後書き）

これだけ書くのに疲れました（笑）。次はいつになるか分かりませんが、できるだけ頑張ります。

第一章「平和な世界」1（前書き）

以外と早く出来ました。第一話です。

第一章「平和な世界」1

レオル・カーシは盗賊に追われて、一面の砂漠を乗っている砂航蟲に猛スピードで走らせていた。その通る後には、砂ぼこりが上がり、後続の盗賊達を多少は近付けるのを困難にさせている。

「なんでこういつもいつもトラブルばかり……」

レオルは愚痴を飛ばしながら砂航蟲にスピードをあげる事を要求する。しかし限界のスピードに近いのか、砂航蟲はこれ以上ないというほど激しく動かしている脚をあとほんの少し早めただけだった。

スピードはほとんど変わらず、対して盗賊達は少しずつ距離を縮めてきている。

レオルの砂航蟲は上にまたがる一人乗り用で、まだ若いためかなりのスピードが出る。時速にして約六十キロほどだ。

しかし盗賊達はそれよりさらに速いらしい。外見はまったく同じ種類の砂航蟲だが、どうやら脚の強化と内臓(なか)まで改造されているオーダーメイドのようだ。

いや、むしろ改造したのかな？　レオルは思いながら舌を打つ。そろそろこいつを休ませないといけない。長時間走れるような体力を持ってはいないのだ。

だが盗賊達はそれを許してはくれないらしい。じわじわと追い詰め、獲物が弱ったところをしとめる。盗賊の常套手段だ。

捕まえた後はレオルを殺し、荷物と砂航蟲を奪った後アジトへ帰るのだろう。

こんなところで死ぬわけにはいかない、とレオルはこの状況を打破するいい手はないかと考える。しかし、追いかけられながら考えても焦りが先にでて上手く考える事ができない。

「早くなんとかしないと……」

はるか前方には街の輪郭が見え始めている。盗賊達を連れて街に突入してもいいが、その場合街の人に迷惑をかけてしまう。旅人の

身である以上、なるだけそういう事態になる事は避けたかった。人々に冷めた眼で見られるからだ。
と、先ほどまでは平面だったところが丸く盛り上がってきている場所を左前方に見つけた。あれは……。レオルは小さくつぶやく。
盛り上がりはどんどん大きくなっていき、そしていきなり砂漠の地面は爆発したように四方八方へ飛び散り、巨大な砂塵を形づくった。そのなかでは、むやみやたらにでかいミミズの頭に牙をいくつもつけ、身体には所々に刺が生えたワームと呼ばれる蟲がうごめいている。
「うわ……でかいな」
その大きさは凄まじいものだった。見えているだけでも普通のワームの五倍ほどの大きさだ。
普通のワームは十メートル前後しかない。だがこのワームは軽く百メートルを越えてまだありそうだった。これは異常である。
「砂漠の主……かな。どっちにしろ利用できそうだ」
ワームはアーチを描いてまた砂の中に潜り込もうとしている。危険だが、その下を通ればあるいは振り切る事ができるかもしれない。
「どっちにしろもう時間がないし」
盗賊達はすぐそこまで迫ってきているし、何より砂航蟲の体力が限界だ。
「あーくそっ。行くしかないか！　死んだら死んだでその時だ！」
レオルは、ワームのアーチへと砂航蟲を向けた。
あの中を通り抜けるには何が必要か。レオルはさっと考え、防塵マスクをつけてマントを羽織った。
そのままアーチの下へと進んで行く。砂塵の壁が目前に迫る。壁は厚く、向こう側は完全に見えなくなっている。しかしレオルはかまわず突き進んだ。
壁の中に入る。
そこはほぼ前が見えず、太陽に熱せられた砂によってかなり暑かった。

一瞬、横に盗賊がいたようにも見えたがたぶん見間違いだろう。自分の手元もろくに見えないようなところなのだ。たとえそれが事実だったとしてもどうしようもない。
そもそも、盗賊達がレオルを追って壁の中へ入ってきているかどうかも分からない。
しばらくの間、砂がマスクやマントに当たる音だけが続く。頑張ってくれよ、クローム。砂航蟲の名前をマスクの中で思う。
壁が長い。それは、そのままこのワームの巨大さを物語っていた。永遠とも思える短い時間が過ぎた時、突然壁を抜けた。煙のように砂ぼこりの尾を引きながらアーチから離れる。レオルは後ろを確認した。
「……振り切ったか」
壁に入るのを諦めたか壁の中で死んだかは分からないが、盗賊達はついてきていなかった。
レオルは、クロームにスピードを落とすように言った。それに反応しクロームはスピードを落としていき、やがて人が小走りする程度の速さになる。
マントの砂をはたき、マスクを外してため息をつく。
「疲れた……。サンキュー、クローム」
レオルは言って、クロームの背を撫でた。半機械化された蟲は、それに小さな唸り声で答える。
「よし、また見つかる前に街に行こう。それぐらいならまだ保つだろ？」
クロームはまた唸り声をあげた。
「わかった。あとで洗ってやるよ。肉はあるかどうか分からないけど努力する。じゃあ行こうか」
そして、スピードをあげてレオルは街への進路をとった。
エルノフ砂漠の南東、ヴルムの森の程近くにある街、ネルトード。比較的新しい街であり、井戸もまだまだ元気に水を出している。建物は風化しておらず、塗装などもしっかりと残る、砂漠にしては珍

しい街だ。
特産品は、エルノフ砂漠だけにしか咲かない特殊な植物から摘んだ葉を使った、タバコである。
もちろん、他の街でも手に入れる事はできる。しかし、この街の物は『味』が違う。しかも常に品薄な事で有名で、貴重な物だ。愛煙家には、一生に一度は吸ってみたいと言われるタバコのランキングで常に上位に入っている。
だがその分、偽物も多く出回っているため注意が必要だ。偽物には、本物には無い危険な成分が入っており、吸い続けると植物人間状態になってしまう。
レオルは、宿を取ったあとクロームをおいて市場に行き、本物かどうかをよく調べてから十本買った。自分で吸うわけではないが、他の街で売ればそれなりの値になるからだ。
次に、クロームのための生肉と整備用の油、自分のための食料と水。それと銃弾をいくらか買った。銃はなるだけ使わないようにしてはいる。だが、万が一の時にすぐにでも使えるようにいつも腰に下げていた。
このご時世、自分の身は自分で守れ、悪の手先は正義の味方、が合言葉だ。戦争時代とは打って変わって平和な毎日だが、いつもなにかしらの事件は起きているし、路地裏では悪が横行している。
それでも、昔に比べれば天国のはずだ。と、レオルは五対一の私刑の現場を横目で見ながら通り過ぎ、思う。

レオルが宿に戻ると、さっそくクロームが肉を要求してきた。
「先に身体洗うよ。汚れまくってるし、整備も必要だろ？肉はそのあと」
クロームは不満そうに、グルグルと鳴いた。
「ダメだって。俺も腹減ってるんだからさ。それに、今の内にやっとかないと夜になるし」
クロームはグルッと鳴いて、諦めたように了解の意を示した。

レオルは、クロームを洗うために井戸の使用料を宿の主人に払った。少し高く財布には大打撃だったが、結構な量の水を使うので仕方が無い。レオルはクロームを連れて井戸のある中庭に連れ出した。
「じゃ、ちょっとの間動くなよ」
そう言ってから、レオルは井戸の水を汲む。水の入った桶は重く、なかなか引き上げる事ができない。気を抜くと、桶はすぐに底まで落ちてしまい、もう一度最初から引き上げる事になる。
苦労して汲んだ水を、まずはぶっかけて大きな汚れを落とす。大半は砂だが、時には鳥の糞が付着していたりもする。布に石鹸を付けて泡立たせ、それで全体をゴシゴシと擦る。
機械部分は比較的簡単に擦れるが、蟲の本来の皮膚である甲殻は凹凸があるので結構難しい。甲殻との間など、細部に詰まった汚れもこそぎ落とす。
また水を汲み、ぶっかけ、泡を洗い流していく。数回繰り返すと、完全に泡は落ち、綺麗になった。
水を乾いた布で拭き取ると、レオルは機械部分の整備に取り掛かる。各部の動作チェックをしながら油を点していく。それが終わると、レオルはクロームの背を叩いた。
「はい、終わったよ。調子はどうだい？」
クロームはグルルと鳴いて身体を動かした。レオルはそれに笑って返す。
「そうだな。俺ももう食べたいから部屋に戻ろう」
主人にお礼を言い、二階にとった部屋に戻る。肉を与えると、クロームはすぐに食べ始めた。レオルはそれに半ば呆れながら声を掛ける。
「じゃあ俺は下で食べてくるから、留守番たのむよ」
クロームは了解の意を示す間も惜しいように、クッと鳴いた。
「……なんだかなぁ」
レオルは一人嘆息しながら食堂へ降りて行った。　宿屋の食堂。そこは酒場と同様、旅人達の憩いの場だ。皆、それぞれが持ってい

る情報を上手く使って、自分の知りたい情報を聞き出す。どれだけ少ない対価で、どれだけ多くの効果をだすか。それは、旅人一人一人の腕の見せ所だ。

ベテランともなると、ほとんど労せずに情報を引き出す。逆にいえば、素人は苦労して聞き出しても、偽の情報だったなんて事だってある。非情な世界だ。

レオルは開いている席を探した。主人と旅人、両方と話せる比較的情報の得やすい場所であるカウンターは、開いていなかった。一つ四人がけで、五つあるテーブルもほぼ満席だ。椅子は二つしか開いていない。

しかも、片方はいかにも家族旅行をしています、という雰囲気を醸し出している。家族の団欒に水を差すのはマナー違反だ。必然的に、レオルはもう片方に座る事になる。もしくはカウンター席が開くのを待つか、それとも食べるのを諦めるか。レオルは少し考えてから待つ事にした。

ただ単に飯を食いに来ただけなのに、情報の探り合いにさらされるなんてゴメンだ。飯はゆっくりと食べる。これはレオルの信条であり、また心掛けている事だった。

そうして、レオルが部屋に戻ろうとした時だった。

「ああ？　ガキがふざけた事言ってくれるじゃねぇか」

その怒鳴り声と同時に男が一人、荒々しく席を立った。その手は少年の胸ぐらを掴んでいる。少年は高く持ち上げられ、苦しそうにもがく。

「だ、だって本当の事じゃないか！　あれは僕たちだけじゃ…」

「うるせぇ！　無理だろうとなんだろうとこなすのが俺等の仕事だろうが！　それとも何か？　びびってんのか貴様は！」

「違うよ！　でも絶対無理だって！　昼間だって死ぬとこだったんだよ！？」

「それがどうした！　俺等の顔に泥塗ったヤツを逃がしていいと思ってんのか貴様は！」

「でもどうやって見つけるんだよ！」
「こうやってだ！」
乱暴に少年を椅子に叩きつける。そして男は懐から一枚の紙を取り出してばっと広げ、食堂にいる全員に見えるようにした。
「おいお前等！　こいつがどこにいるかしらねぇか？」
と、しかし。
客は全員無視してそれぞれの会話や食事に専念している。レオルを除いて。答えはしなかったが。
「っておい。お前等無視してんじゃ…」
「うるさいよ君達。死んでみるかい？」
突然、主人が言い放った。
「あ？　んだとコラ……」
と、その途中で男は言うのをやめた。主人の手にライフルが握られていたからだ。そしてそれは男に向けられている。
「最近、使ってないからそろそろ使おうかなぁと思っているんだけど、どうかな？」
主人はゆっくりと、冷ややかな声で告げる。
「え、あ、いや、すみませんでした。使わないでください」
そう言って男は席に座って飯を食べ始めた。その手はいささか震えている。
「分かれば、いいんだよ」
主人はにこやかに笑うと、ライフルをしまった。
しばらくして、飯も食べ終わり部屋に戻ったレオルは、暗くなった窓の外を眺めながら先程の騒ぎの事について考えていた。二人が言い争っていた内容が少しばかり、気になったからだ。自分の事かも知れない、と思ったからでは無い。
男が広げて見せた、紙。それには、レオルがかなり前に見た事のある、一匹の砂航蟲に乗った少女が描かれていたのだ。しかも、レオルが旅を始める事になった『元凶』。
レオルは小さく、ふっと笑うと呟いた。

「驚いたな……。こんなところで……」
窓から見える星空を見上げる。砂漠の済んだ空気は、幻想的なまでの星の輝きを観せてくれる。誰かの願い事を叶えるために流れ星が空を横切り、星達は瞬きながら宇宙という名の大パノラマを描きだす。この空を、アイツも見ているのだろうか。
「なんにしても……明日、だな」
あの二人と話してみなければいけない。アイツがこの近くにいるならば、どうにかして逢いたい。そして……。
グルル、とクロームが鳴いた。レオルに近づき、わしゃわしゃと口を動かす。
「なんでもないよ。さ、明日も早いしもう寝よう」
レオルはクロームの背中を一撫でして、布団の中に入った。
明日は、大変な一日になりそうだ。レオルは明日行動すべき事を考えながら眠りに落ちていった。

第一章「平和な世界」2（前書き）

第二話です。今回から短めで書いていきます。あと前回書き込むの忘れてたので、砂航蟲はサコウチュウと読みます。こんなところですみませんm（__）m

第一章「平和な世界」2

夢。
全て『夢』だと思いたかった。
あの日、あの時。
全てが一瞬にして変わったのだ。
まるで、『大破壊』の再来のように、日常が、非日常へと。
そして、あの少女は言ったのだ。
悔しければ、乗り越えて来いと。
知りたければ、追い付いてみせろと。
だから、俺は……。

昨日の内に話を聞いておけばよかった。と、レオルは一人嘆息した。主人に二人の部屋を聞いたが、すでに宿を出てしまっていた。
「はぁ……まさか寝坊するなんて」
自分で明日は早いなどと言っておきながら、目を覚ましたのがもうすぐ正午という時間だった。いつもは日の出と同時に起きるレオルだが、なぜか今日に限って起きる事ができなかった。しかも、あの遅起きのクロームに起こされた。ある意味、屈辱だった。
「せっかくの手掛かりだったのに……くそ」
頭をガシガシと掻く。それによって、その特徴的な茶髪がいささか乱れた。
「とりあえず、森の方に行ってみるか」
主人の話によると、二人は森にある遺跡について話ながら出ていったという。そこに二人が向かったのか、単に話題にしていただけ

なのかは分からないが、ただそこらへんを捜すよりは行ってみたほうがいいだろう。
遺跡は確か、ヴルムの森を少し入ったところにあったはずだ。
「クローム、また長旅になるよ。食料なんかは買ってあるから大丈夫だけど、ちゃんとしたメンテナンスはできないからな。森に入るし」
レオルは遺跡までの地図を頭に描きながら言った。遺跡までは、ゆっくり行けば約四日、急げば三日ほどかかる。今は正午だから、日が落ちる頃には森の端にはたどり着く事ができるだろう。またそこからの道のりが大変だが。

二人を見た者がいないか、聞き込みをしながら街の出口へと向かう。見た者は、皆一様に出口を差した。やはり、二人は森へ向かったのだろう。
「はぁ……面倒だな、まったく」
レオルは二人の痕跡が出口へと向かうたびに、そうため息をつく。できれば森に入る前に二人に追い付きたい。ヴルムの森は危険だ。蟲しかいない森、即ち蟲にとっての楽園なのだから。
出口まで来ても、二人の姿は確認できなかった。そして、ここでも人々は二人の痕跡を砂漠へと指し示しす。
「少年と男の二人組？　それなら外に行ったよ。結構大きな砂航蟲を連れていたねぇ」
「そうですか。ありがとうございます」

この時、レオルは自分の身に降り掛かる事をまだ知らなかった。森へ向かうという事がどれだけ危険か分かっていたとしても、防ぐ事のできない、命に関わる事態を。
とにもかくにも、レオルはクロームの背中にまたがり、街の出口をくぐって森へと進路をとった。
砂漠を進むのはかなりの苦労を伴う。日射しから、フードやコー

トだけで頭や身体を防ぐ。草木や岩などもない、延々と黄色い砂の平原を森を目指して進む。
蜃気楼によって歪んだ地平線に、時折はっきりと見えるそれは、蟲達によって少しずつ砂漠を『侵食』し『拡大』している。何百年か後にはネルトードの街も飲み込まれてしまうだろう。
レオルはその蟲達（ヴルム）の森へ向けてクロームを進める。スピードは早めの三十キロほど。
体力の低下は早くなるが、かなり前に出てしまったであろう二人組に追い付くには、少々無理をしなければならない。すでに森に入ってしまっている可能性もあるのだから、急ぐにこした事はない。
大きな砂航蟲を蜃気楼の中に探す。だが見えるのは、ワームの上げる砂塵や前方にあるはずのない街、遥か遠くにあるはずの海の映像などだった。
近くに砂航蟲の足跡も見えない。もしかしたら飛行するか、地中を進むタイプのものかもしれない。どんな形だったか聞いておくんだった。と今更ながらにレオルは思う。
「クローム、水はいいかい？」
砂を蹴散らしながら走るクロームに聞く。いくら半機械化されているとはいえ、やはり生き物だ。水分は命である。
クロームは唸るようにして答えた。
「わかった。じゃあちょっと止まってくれ」
レオルが言うと、少しずつクロームのスピードが落ちていった。それに伴い脚も穏やかな動きになっていき、巻き上げる砂の量も減っていく。やがて人が歩くぐらいのスピードになり、クロームは止まった。
それまで感じていた風もなくなり、体感温度が急激に上がる。
「あっつ……」
そうぼやきながらレオルはクロームから降り、水の入ったタンクと吸水用ホースを、後ろに据え付けてあるラックから取り出した。
そしてタンクの蓋を開け、ホースを突っ込むと無造作にクローム

の前に置く。
「結構飲むだろ？」
ホースをクロームの口元に持っていく。クロームは一声鳴くとホースをくわえ、水を飲みだした。
「あと六缶あるから、それ全部飲んでいいよ」
言いながらラックから水筒を取り出す。袋状のそれは、旅する者なら必ず持っている必需品だ。レオルは水を飲むと辺りを見渡した。
やはり砂漠。相変わらず砂ばかりである。森は近づいているようには見えないし、大きな砂航蟲というのも今のところ見えない。
「空にもいるようには見えないし……。っとなんだあれ？」
左、空のかなり上の方から、何かが、降ってきている。形からして飛行型の砂航蟲だろう。気を失っているのかいないのか。どちらにしろ、羽が片方無い。そして、何より煙をあげている。何かに燃やされたのか。
「まずいな、あれは。クローム！」
こういう時のクロームは素早い。半分ほど残っていた水を一気に飲み干した。
「……残さないところはさすがだな。まぁそんなことより早く行こう！」
レオルは手早くタンクとホースを片付けるとクロームに飛び乗った。
クロームがいななく。そして落下していく砂航蟲の方向へと走りだした。

第一章「平和な世界」3（前書き）

第三話です。今回は前回よりさらに短いです。毎度毎度ヘタですが、お付き合いくださいｍ（　　）ｍ

第一章「平和な世界」3

砂航蟲はレオル達から離れるようにどんどん落下していく。
そのスピードはかなり速い。全速力で走るクロームがだんだんと引き離されていく。
「それにしてもボロボロだな。何があったんだ？」
レオルは砂航蟲のありさまを見て思わず口にだした。所々から火が吹き出しているし、機械か甲殻かの小さな破片が分離して煙とともに尾を引いている。片方だけ残る羽も焦げ付き、穴が開いているようだ。
クロームが吠えた。
「は？　探しているのと似たエネルギー反応ってなんだよ！　それより救難信号は出てないのか！？」
あの形状の砂航蟲は飛行するタイプの中でも乗り込んで操縦するものだ。緊急時用脱出口が開いていないから中に誰か乗っているはずである。そして救難信号が出ていないなら、ああなる前に気絶か最悪死んでしまっている可能性がある。
クロームは否定の声を上げた。
「……まずいな。あのままじゃ激突するぞ」
救難信号が出ていれば、緊急用コードでこちら側からの脱出操作ができるのに。と、レオルは舌打ちをする。
いくら砂漠とはいえ、激突した時の衝撃はかなりのものだ。そのままバラバラになるかもしれない。
「大丈夫だといいんだけど……」
そんな気休めの言葉を発してしまうほど、あの砂航蟲の状況は悪かった。あと数十秒で墜ちるだろう。そのあとすぐに救出するのも無理そうだ。すでに遠く離れ過ぎている。このまま全速力で追っても墜落地点まで１０分ほどかかるだろう。
何か、嫌な予感もする。

レオルは先ほどのクロームの言葉を思い返す。似た反応とはいったいどういう事なのだろう。

「まぁでも、良い悪い関係なしに危ない事にかわりはないし」

乗っている人も砂航蟲も助けなければ。

そして、ついに砂航蟲は墜落した。

第一章「平和な世界」４（前書き）

だいぶ間が開いてしまいましたm（__）m第四話です。相変わらず短いです。

第一章「平和な世界」４

蜃気楼に阻まれよく見えないが、遠くに小さな砂柱が上がっている。いや、実際はかなり大きなはずだ。これだけ離れていてもはっきりそれと分かるのだから。墜ちた砂航蟲の巨大さもうかがえる。

「それにしても、今日中に森に行くのは無理だな」

助けたあとは街の救助隊へ連絡。怪我人が重症の場合は、応急措置を施して救助隊がつく前に街へと搬送を開始しなければならない。それが終わる頃にはもう夜になっているだろう。そして夜の砂漠を移動するのは大変危険だ。

昼間の暑さで出てこなかった蟲や動物が活動を始めるからだ。ワームはもちろん、サソリに似た巨大な蟲や砂漠にしかいない狼、最近見かけるようになった野生化した砂航蟲や猛禽類など、夜に住む凶暴な者達が動きだす。盗賊なども例外ではない。

ようやく砂航蟲の墜落地点に着いたレオルはその大きさに呆れた。

「さすが飛行タイプだな。お前の十倍は軽くあるんじゃないか、クローム」

そう言いながらレオルは砂航蟲を見上げる。さながら巨大なセミと言ったところか。太く丈夫な金属のような脚、拳銃の弾も通らない立派な甲殻。蜘蛛のような左右六つずつある紅い眼。岩をも噛み砕く頑丈な顎。

そして何より半透明の複雑な模様の羽根が印象的だ。光の当たりぐあいによっては黄金に輝く。今はあちこち焦げて穴が開き片方欠落しているが、これが本来の姿で飛ぶと壮大な眺めになるだろう事は簡単に想像できた。少々怖いかもしれないが。

「さて、中の人は大丈夫かな」

レオルは声を張り上げる。

「おーい大丈夫かー？　誰かいないかー！　返事しろー！」

答えは砂航蟲も含め無言だった。砂航蟲は単に気絶しているだけ

だろうから問題はないが、乗員が少し心配だ。
もう少し声を掛けてみる。だが返事は返って来なかった。
仕方なく救出活動を行う事にする。
「気絶してるだけだといいんだけど。えーっと、ハッチはどこだ？」
いくつかある脱出口のうちの一つを探し当て、工具を使って取り外す。その瞬間熱気がレオルの顔に当たった。
「ありゃ、空調が壊れてるのか。……ちょっとまずいかな」
墜落した時の衝撃だけでなく、暑さによって死んでしまっている可能性もでてきた。
本当に無事だといいんだけど。レオルはそう願い中へと入っていった。

第一章「平和な世界」４（後書き）

次もまた間が開くかもしれませんがその時はすいません。

第一章「平和な世界」５（前書き）

５つ目です。ただいまスランプ状態で（早い）なかなか書けません（謝）でも、頑張ろうと思います。

第一章「平和な世界」5

途端、レオルはまるでサウナの中にいるような感覚に見舞われた。暑い、というよりむしろ、熱い。この中にずっといたら確実に熱中症になってしまうだろう。汗も滝のようにでてくる。こころなしか視界もぼやけて見えた。

「くそっ。こりゃかなりきついな」

巨体にしては狭い通路と数個しかない部屋をそれぞれ見ていく。だがあるのは墜ちた衝撃でめちゃくちゃになった書類や装飾具などの物だけだった。人は見当たらない。

「変だな……五人くらい乗ってそうな大きさなのに」　そう呟きながら操縦室の扉を開けようと取っ手を握る。そして気付いた。

よく見ると、扉がほんの少しだが歪んでいる。しかしその歪みのせいで、いくら押しても引っ張っても扉は動きもしなかった。

工具を使うしかないか。そう思いながら、その中にいるであろう誰かに向かってレオルは声を掛ける。

「おい大丈夫か？　今助けるから待ってろよ！」

いったん工具を取りに戻り、それからバールを使って扉をこじ開けにかかった。大きな音を立てて扉が軋む。

と、その時中から声が聞こえてきた。

「う……くっ……、誰？　あれ……は……誰にも……」

「よかった、無事か！　助けに来たんだ。もうちょっと頑張ってくれ！　今助けるから！」

「助……け？　よかっ……あれを……」

と、そこで声が途切れた。

「っ……！　おい！　大丈夫か！　返事しろ！」

力任せに扉を破ろうとバールに力を込める。メキィッと音がして大きく扉が歪む。その歪みは強くなっていき、ついに限界が来て破壊音とともに扉が開いた。

急いで中に入る。
そうしてレオルが見たそこには、
「なっ……女の……子？」
気絶しているのか、レオルと同じくらいの歳の少女がうつ伏せで倒れていた。最低二人は動かすのに必要なこの砂航蟲に、一人だけで。
しかもその少女は、墜落した拍子に負ったのであろう、頭に傷を負いそこから血を流していた。
短めの青い髪や、砂漠には似付かわしくない服――海上都市の住民が着るような活動的なもの――が赤く染まってしまっている。
レオルは舌打ちした。
「怪我がひどいな。下手に動かすのは危険か。かといって救助隊を呼ぶ時間もなさそうだし……、とりあえず応急措置だな」
脈を計り、ちゃんと生きていて気絶しているだけだという事にほっとして、レオルは簡単な応急措置を施す。少しずつ流れ続けている血を圧迫して止め、包帯を取り出して少女の頭に巻いていく。常時携帯しているこの包帯は殺菌作用もある優れものだ。レオルも今まで何度もお世話になっている。
巻き終えたら頭をなるだけ動かさないようにして少女を外へと運びだす。暑さで体力の消耗が激しく、なかなか大変だったがなんとか運びだす。砂航蟲によって影になっているところにシートを敷き、そこに寝かせた。熱中症や脱水症が起こっていなかったのは幸いだった。
目が覚めないので、とりあえず水を飲んだりして起きるのを待つ事にする。レオルは少女に聞きたい事があった。
少女が、探しているアイツにとても似ているその理由を。

第一章「平和な世界」６（前書き）

第一章の６です。いつもよりちょっと長めです。

第一章「平和な世界」6

それにしてもよく似ている。ほとんど瓜二つと言ってもいいだろう。

青い髪も、どこか幼さの残る端正な顔付きも、白さの際立つ肌も、全てがよく似ている。起きたら本人かどうかを確認しないといけない。人違いなら期待は肩透かしをくらう事になるが、まぁそれも一興だ。

レオルはニ杯目の水を飲む。『元凶』かもしれない少女が目の前にいるのだから仕方ないのだが、どうも落ち着かない。

そう思いながら少女の顔を覗き込んでいると、急にその眼が開かれた。

「うわっ！？　……っと目が覚めたか。えっと、気分はどうだい？」

内心慌てながら少女に聞く。が、少女はそれに答えずぼんやりとした眼でレオルを見つめた。そしてはっとしたように眼を見開くと、寝たままの状態から器用に足と腰を使って回転しながら立ちあがり、警戒するようにあとずさった。

「あなた……誰？」

少女は一言だけそういうとゆっくりと周りを見渡し、クロームを見つけると一瞬だけ絶望したような顔をしレオルを睨み付けた。

「禿鷹なんかにあれは渡さないわよ！　絶対に戦争は起こさせない！」

禿鷹？　戦争？

何の事か分からないレオルは少女の気迫に少々気押されながらも、誰かという質問に答える。

「俺はレオル。旅人のレオル・カーシだ。君は？」

「名前なんか聞いてないわよ！　盗賊なんかに名乗る名前もない！」

「旅人だって。ちょっと落ち着いてくれないかな？」

レオルは心の中だけでため息をついた。

他人だ。アイツはもっと冷めた話し方だし、第一眼の色が違う。アイツは深紅だがこの少女は銀に近い青色だった。
「俺が盗賊の……しかも禿鷹なら君はとっくに死んでるか、アジトに連れていかれてるよ。それに、戦争って何の事だい？」
その言葉に、少女はレオルの方を警戒しながら自分の胸元に手を当て、何かを探るような仕草をしながら言った。
「あるわ……ね。でも、私は騙せないわよ。あの砂航蟲が禿鷹のメンバーの標じゃない……。マーキングがされてないわね。隠密部隊ね」
「あのなぁ、違うって言ってるだろ？　旅荷物満載にした砂航蟲に盗賊なんかが乗ってるわけないだろ？　こいつはクローム。れっきとした俺の旅仲間だよ」
クロームがグルグルグルと唸った。盗賊と一緒にされた事を怒っているらしい。
少女はレオルとクロームを交互に見ると、少しだけ警戒を解いたらしく、ほっとしたような声で言った。「仲間とか近くにいないでしょうね？」
それにレオルは肩をすくめて答える。
「仲間なんかいないよ。でも盗賊には囲まれてる可能性はあるね。砂漠の真ん中に落ちたんだから、あいつらが気付いていてもおかしくない」
それに少女は今気付いたように自分が乗ってきた砂航蟲を見た。そのまま何も言わないのでレオルは声をかける。
「それにしても無茶したね君。こいつ五人は乗れるやつだろ？　二人で動かさないといけないヤツを一人で乗るとかそう簡単にはできないよ」
少女はそれに答えずじっと大きな砂航蟲を見つめ、それからレオルを見た。そして何か一言呟いた。
レオルはコップを取り出して水をそそぎ、少々に差し出す。
「ところで水飲むかい？　食べ物もあるけどまだ夕飯の時間じゃな

いからまた後でだね。まぁ俺としては早く君を街に連れていってそのあと自分の予定をすませたいんだけど。どうせ明日になるだろうけどさ」
少女は差し出された水を困惑したように受け取る。
「……あなたが、助けてくれたってわけ？」
「まぁ、そういう事になるね。あ、そうそう頭の傷はしっかりと治療しておいた方がいいよ。跡になるから」
それに少女は不審そうに頭に手をやり、小さくあっと声を上げた。
「どうやらほんとみたいね……。レオルって言ってたわよね。あなたいったい何者？　普通のヤツならこんな事しないでしょ」
「砂漠の旅人は困っている人を助ける。これ常識。そういう君はだれだい？　どうやら海から来た人みたいだけど」
「エルフィ・レインコートよ。察しの通り、海の旅人」
「エルフィね。じゃあエルフィ、俺は君を一応街まで送らないといけないんだけど……」
「街？　私は街には行かないわよ。行かないといけないところがあるから」
「このでかい砂航蟲で？　言っとくけど無理だと思うよ？　気絶してるみたいだし第一羽根が損傷してる」
「そんな事は分かってるわよ。だからあなたに頼むのよ」
「はぁ？　無理言うなよ。俺だって森の遺跡に行かなきゃなんないんだから」
「そこよ！」
少女は大声で言った。
「私もヴルムの森とかいうのに用があるの！　確かヴルムズ遺跡だったかな？　いいじゃない。連れてってよ！」
急速に馴々しくなっていくエルフィに、レオルは少々呆れながら、
「今からじゃ夜までに森に着かないよ。明日街から出直した方がいい」
そう言ってかぶりを振ろうとしたその時だった。

遠くから大量の砂航蟲がやってくる音がし始めた。その方向を見ると、それは紛れもなく昨日レオルを追い掛けて来た盗賊、即ち盗賊団『禿鷹』だった。
黒い帯となってそれは押し寄せてくる。大半が、昨日レオルが見たのと同じ砂航蟲だが、中には大きいものに二、三人で乗っているものもある。正面からは見えないが、それらには総じて禿鷹の絵を白線で囲んだマーキングが付いているはずだ。
「多いな、なんであんなに……」
「私を確実に捕まえたいからよ。それより、あなたが奴等の仲間じゃないのなら私を連れて逃げてくれない？　捕まるわけには行かないのよ」
そう言いながらもエルフィはクロームの荷台に早々と乗り込んだ。もう完全にレオルを信用しているようだ。
「いやまぁそのつもりだけどさ……」
ため息を付きながらシートを片付け、クロームの背中にまたがる。そして巨大な砂航蟲を指して言った。
「あの砂航蟲はいいのか？」
それに、エルフィはちらっと砂航蟲を見ると言った。
「大丈夫。あれは私のじゃないから」
少しだけ悲しそうに顔を俯かせる。そしてさっと顔を上げた。
「そんなことより早くしてよ。捕まっちゃうじゃない！」
「分かった。んじゃクローム。ちょっと重いかもしれないけど頑張ってくれよ」
クロームは唸り声を上げた。後ろの方から何か文句が聞こえてきたがレオルはそれを無視する。
「また肉？　そんなに買ってないんだけどな……ま、いっか」
「えっ、ちょっとあなた今……」
「掴まってろ！　行くぞ！」
「あっ、ちょっと待っ…きゃあっ」
ガクンとクロームの身体が大きく揺れて走りだした。エルフィの

倒れる音と悲鳴が聞こえるが気にしていられない。すぐそこまで禿鷹が迫っているからだ。ぐんぐんスピードが上がり、走りだして十秒もしないうちに最高速度になる。
「くそっ無理か！？」
やはり禿鷹の方が若干速い。走る方向をでたらめに変えて引き離してもすぐにまた追い付いてくる。なんとか横に並ばれないようにするだけで精一杯だ。しかもレオル達が街の方に行かないように誘導されている。砂漠で仕留めるつもりらしい。
「ちょっと何やってるのよ！　もっと速く！」
「向こうの方が速いんだよ！　これで精一杯だっての！」
どうすればいい？　考えろ！　街がダメなら……くそっ森しかないじゃないか！
その結論に至った直後だった。エルフィの叫び声が上がる。
「よけて！」
咄嗟に方向を変える。その一瞬後を白煙を引きながら鉄の塊が通り過ぎた。そして地面に落ち、それと同時に地面ごと爆ぜる。
「ロケットランチャー！？　マジかよ本気になり過ぎだ！」
このままでは吹き飛ばされて終わりだ。レオルに迷っている暇は無かった。
「あ―くそっ！　だからなんでいつもいつもこうなるんだよ！　森に向かう！　それでいいんだろエルフィ！」
レオルが叫ぶとエルフィが喜びの声で叫び返す。
「分かってるじゃない！　どうせ行くなら今しかないのよ！」
そうして、二人は偶然の導きからか同じ場所に、違う目的で、一緒に向かう事となった。

第一章「平和な世界」6（後書き）

次は第二章に入ります。いつ更新できるかわかりませんが（；^｜
^A

第二章「王の民」1（前書き）

内容がオモイツカナイですどうしましょう（汗）まぁ、とりあえず第二章スタートです。

第二章「王の民」1

戦争。

戦争が長引くと、数多くの兵が死ぬ。日に日にその数は増え、徴兵制を採る国は働き手を失い疲弊していく。そして国は崩壊し他国に呑まれ、隷属の身となる。ならば、そうなる前に相手の国を隷属の身にしてしまえばいい。

いかにして相手を出し抜くか。戦争という特殊な状況下でのその考えが、各国に同盟を結ばせては解散させた。

裏切りによって消滅する国もあったが、逆に返り討ちにあう国も多発した。

それでも、最初の内は世界大戦を早期終結させる良い手段だったのだ。

だが、多数の弱小国家が滅び強大な力を持つ国家群が残ったあとが問題だった。それぞれの国の力に差がなくなったのだ。どの国も強く、そして弱い。軍事力も経済力も国の規模も同程度。どこかに軍を出せばその隙を好機として他国に攻め入れられる。先に手を出せば敗ける、微妙な力の均衡状態が形成されてしまった。長い冷戦の始まりである。

「ちっ、あんの糞野郎め。この俺様にあんな物騒なモンを向けやがるとはな。危なくキレて殺す所だったぞ」

「おもいっきりビビッてた人が何言ってるんだか」

「うるせぇよカス。手加減してやっただけだっての」

「あれの何処が手加減なのさ。せっかく情報が手に入ると思ったの

にフェードのせいで台無しだよ。なんでいつも見境なしに怒鳴るのさ」
「その方が簡単だろうがよ。脅して得た情報こそ一番真に近い。親父がそう言ってたからな」
「……自分はヘタレなくせに」
「死にたいのか？　ハトル」
「そっちこそ死んだほうがマシに思えるくらい痛め付けてあげようか？　せっかく尻尾掴んだと思ったのに逃げられて、報酬が貰えなくて危うく行き倒れしかけたのは誰のせいだったっけ？　それに、昨日の失敗もアンタのせいだって事、分かってるよね？　もし違うって言うんなら分かりやすく説明してくれないかな？」
「スマン、悪かった。だからそれはしまえ。運転ができん」
そう言って男、フェード・セロナクスは冷や汗をかきながら砂航蟲のスピードを落とす。
「あ、やっと見えたね。何処か森の中に降りられる場所ある？」
少年、ハトル・ヴァーランはフェードに突き付けていたナイフをしまった。そして森の中に開けた場所を探す。
朝から飛び続けた結果、昼頃になってやっと目的地である遺跡の近くまで来たのだ。森が育ちすぎてほとんど隠れて見えないが、ヴルムズ遺跡と呼ばれる廃墟のそれが確かにそこにある。
フェードは辺りを軽く見回して言う。
「遺跡の上でいいんじゃねぇか？　パッと見無いぞ」
「防御システムとか言うのに存在を消滅させられてもいいならね。あそこなんかどうだろ？　ちょっと無理すれば降りられるんじゃないかな」
首を振りつつハトルが指した先は、確かに二人が乗る砂航蟲が降りるには少々狭いが、遺跡からは近すぎでも離れすぎでもない丁度いいところだった。
「よしじゃああそこに降ろすぞ。掴まってろよガキ。ところで本当に此処にいんのかよ王の民はよ」

「いるんじゃなくて来るんだよ。回るべき遺跡の順番からして次は此処のはずなんだ。エルフィ・レインコートは必ず此処に来る。戦争を始めさせないために」
「そこを俺様達が捕らえる……と。ついに報酬が貰える時が来たな」
砂航蟲を着陸させる動作に入る。慎重に、だが大胆に降りていく。ハトル達の砂航蟲は、大きさのわりには甲殻上に操縦席がある飛行型にしては珍しいタイプのためなかなかに操縦が難しいのだが、フェードは木にぶつけたりしながらもなんなく砂航蟲を着陸させた。
砂航蟲にここで待つよう支持を出し、二人は森の栄養豊富でしっかりとした大地に足を下ろす。雑草や苔に覆われているが、砂漠よりずっと踏みしめている実感がある。
土や草の感触を楽しんだあと、二人は目標捕縛用と護身用の武器をそれぞれ身に付けた。
「気が進まないけど捕縛にしては報酬が凄いしね。標的には頑張ってるとこ悪いけど、世の中金だし」
「お、分かってんじゃねぇか。んじゃ他の組織に先取りされる前に早いとこエルフィとかいうガキ捕まえようぜ。んでパッパと依頼主に引き渡す。情が移っちゃ適わねぇからな。ガハハハハ」
そうして、二人は遺跡に向かって歩き出した。

第二章「王の民」2（前書き）

第二章の二話目です。森の描写って難しいですね（；^_^A

第二章「王の民」2

森の中は木の葉にほとんど光りを遮られているせいで薄暗く、また足場もかなり悪い。
苔に覆われた巨大な木の根が行く手を阻むと思えば、小さな草が複雑に絡み合い天然の罠を形づくっていたりする。それに足を引っ掛けて倒れたりなどすれば大変な事になるだろう。光りを吸収出来ない小さな植物達の中には、小動物などの血肉を栄養源とする物も少なくないからだ。すぐに抜け出す事ができればいいが、それができなかった場合は時間をかけてゆっくりと溶かされ、最後には骨も残らなくなる。
それに、蟲達にも注意が必要だ。野生の蟲には凶暴なものが多く、しかもそのほぼすべてが肉食なのだ。大型動物がいないのもそれによる所が大きい。共食いや餌の取り合いなどは日常茶飯事だ。
そんな蟲達を人間が捕獲、機械化して使役しているのは、うまく使えば役に立つ存在だったからだろう。
その昔、『大破壊』を引き起こしたのも戦闘能力を持った砂航蟲が開発されたのが原因だと言われている。
「ところで、どうするの？」
「あ？　何がだ」
巨大な木の幹を迂回しながら二人は話す。
「捕縛方法だよ。待ち伏せするか、こっちから出向くか」
「待ち伏せがいいだろうな。捕殺なら出向くんだが……おっと」
湿った石を踏んで足が滑り、フェードは一瞬バランスを崩す。ハトルはそれを見て、危ないなぁと思いながら注意する。
「転けないでね。助けるの面倒なんだから」
「うるせぇ。くそっ……かったりぃな。まだ着かねぇのかよ」
悪態を付き、遺跡の方向をフェードは眺める。が、木と小動物、羽根を休めている比較的おとなしい蟲などが見えるだけで遺跡は姿

を現さない。
「まだ五分も歩いてないじゃないか。あと二十分はかかると思うよ？」
「んなこたぁ分かってんだよ糞ガキ。俺は面倒な事が嫌いなんだ。ったく、なんでこの俺がこんな所まで来なきゃならねぇんだ」
糞がっ、と不機嫌そうにフェードは呟く。
「何度も言ってるけどアンタのせいだよ。無茶な運転なんかしたから逃げられたんじゃないか。まぁあの時邪魔が入ったせいもあるけど」
「禿鷹か……。ったく、依頼主様はいったいどんだけの数を雇ってんだか知らないが……、まさかあんなカス共まで使ってやがるたぁな。それほど重要なのかねあの小娘は」
「あいつが、と言うよりはあいつが持ってるカードと血が重要なんじゃないかな。カードは遺跡に眠ってる神の制御に必要だし、王の民の血族はもうほとんどいないらしいし」
「神を動かすのに必要な存在だったか？　ご先祖様も惨い事しやがるよな」
「あいつはカードだけが重要だと思ってるみたいだけどね。自分が王の民とも知らないんじゃないかな」
「無知たぁこれまた恐ろしいこった。……おっ、着いたみたいだぜ」
森が急に開け、二人の目の前には巨大な四角い人口物が二人を見下ろしていた。大破壊以前に作られたその建物はもう数百年経っているはずにも関わらず、白い壁面には傷一つ付いていず滑らかに光りを反射している。
「何回見ても慣れねぇなこれは……」
フェードは嫌そうに顔をしかめる。
「本当に俺達と同じ人間が造ったとは思えねぇ」
「まぁ今の技術力じゃまず不可能だね。それよりも捕縛ポイントを決めようよ。せっかく先回りしたんだし早くやっとかないと間に合わなくなる」

「飛んでここにたどり着いたらの話だろ。あの砂航蟲はかなり傷ついてたからな。砂漠の何処かで墜ちていても不思議じゃあない」
「だとしても必ず此処に来るんだから早くやっとくに越したことはないじゃないか。例え禿鷹に囲まれたとしてもあいつならどうにかして切り抜けると思うよ。妙に運がいいみたいだし」
「それもそうだな。面倒だが……んじゃパッパとやっちまおうぜ。夕飯に間に合うようにな」
　そして二人は作業に取り掛かり始め、幾つかの捕縛ポイントを確保したのち、夕方にはそれを終えた。

第二章「王の民」2（後書き）

次回からまた主人公の二人に視点が戻ります。

第二章「王の民」3（前書き）

今回、浅いです。掘り下げがかなり甘いと思います。もっと練習して腕をあげたいものです（T＿T）

第二章「王の民」3

砂漠の夜、澄んだ月の光が森を照らす。森は黒い影となって横たわり、時折木々の間から淡い燐光が発せられている。自ら光る蟲や植物によるものだ。森の中では月より強い光を放ち、昼間の暗さより幾分か周囲が見易くなっているほどである。

そんな森の中、ハトル達のいる場所とは遠く離れた森に入ってまだ一キロほどの所に巨木の一本が倒れている。それは半分腐っており、まるでドームのように穴が空いている。そこは周りからは見えにくいが、その逆は見えやすいという隠れるのに絶好の場所だ。

その入口には一匹の砂航蟲が、内部には光が灯っている。蟲や植物の物ではない、どこか無機質な白い光だ。

その光によって、穴の内壁に二人の人間の影が映し出されている。砂漠の旅人であるレオル・カーシと、海の旅人であるエルフィ・レインコートのものだ。

昼間の間中ずっと禿鷹から逃げ続けた二人と一匹は、振り切る事も出来ないまま夜になっても走り続けた。

森に突っ込み、ようやく振り切ったかと思えばまた見つかって逃げ、それを繰り返しているうちにここを見つけたのである。

そしてこの穴を気取られない違う場所で追っ手を巻き、後を辿られないように気を付けながらこの穴に逃げ込んだ。万が一のために見張りとしてクロームを外に出しておき、追っ手が来た時にはすぐに知らせるようにもした。

ようやく落ち着いた二人は、布を掛けて光を弱くしたライトを挟んで向き合って座り、先程から真剣な表情で話し合っている。

「今日はここで野宿する。そして明日から二日かけて遺跡へ向かう。でも、見つかったらまずいから隠れながらゆっくりと。それでいいね？」

レオルが確認のために聞いた。エルフィが頷く。

「ええ、いいわよ。でもゆっくりはダメ。私は早く遺跡に行かなきゃならないんだから」
ふむ、とレオルは手を顎にあてて頷いた。そして顎から手を離しエルフィに問う。
「戦争は起こさせない……って言ってたけど、どういう事だ？　君が禿鷹に追われている事と何か関係があるのか？」
「えっ！？　あー……えっと、関係ないわよ？」
なんで覚えてるのよ。とエルフィが呟く。それを不審そうな顔でレオルは見る。
「じゃあ、何故君は禿鷹なんかに追われているんだ？　いくらなんでも、あの数は……、女の子一人を追い掛けるのにあれだけの人数と砂航蟲をさくなんて、普通じゃない」
詮索するようにレオルは問い掛ける。少しの情報も見逃さない、といった顔だ。
「言ったでしょ、私を必ず捕まえるためよ」
対するエルフィは何かを隠すように、真剣だがどこか焦っているような表情で答えた。
「それは聞いた。じゃあ何故君を捕まえる必要が彼等にあるんだ？」
その質問にエルフィは視線を泳がせながら言う。
「えーっと。ほら、私って可愛いじゃない？　だからあいつらは……その……私をお嫁にするために」
「はぁ、もういいよ。君が嘘をつくのが下手なのはわかったから」
諦めたように言い、レオルは一言付け加える。
「それに、君ぐらいの顔ならこの世の中に腐るほどいる」
「なっ！？」
そして、その一言がいけなかった。
エルフィの顔が瞬時に怒りの表情へと変わる。猛然と立ち上がってレオルに詰め寄り、怒鳴る。
「アンッ……タねぇ！　いくらなんでも許せないわよ今のは！」
レオルはその剣幕に少々たじろぎ、

「うるさいって。奴等に見つかったらどうするんだよ」
口元に指を当てて、静かにしろと言う意味のサインをだす。
「それに、本当の事だろ」
「……人の顔ジロジロ覗き込んどいて、よくそんな事が言えるわね」
胸の前で拳を握りしめ、エルフィはわなわなと身体を震わせる。
キッと睨むと嫌悪感でいっぱいの顔でレオルに一言、
「最っ低」
そう言い放ち、足音も荒く穴の隅に行くと無言で横になった。
てっきりそのまま出ていくと思っていたレオルは少し驚いた。が、ふんっと鼻を鳴らすと、ライトを消し自分も横になった。
そしてエルフィには聞こえないように口の中だけで呟く。
「あいつと同じ顔が、可愛いだって？　それは認めるけど……くそっ」
その顔はどこか悲しく、そしてわずかに、悲しみとは違う別の感情がこもっていた。
それはまるで、憎しみだとでも言うような表情、だった。
そして、もう一言。
「まさか、あの二人もエルフィを探してたんじゃないだろうな？もしそうなら、無駄な時間だよなぁ」
そう呟き、目を閉じた。

第二章「王の民」４（前書き）

ひさっっっしぶりの更新です（汗）これからはなるだけ早く更新できるようがんばりたいです。

第二章「王の民」４

～二日後～

ヴルムズ遺跡のほど近く。一本の木の上に、下からは見えない位置に縄がハンモック状に張ってある。
巧妙に隠されたそこは、まさかそのような場所にあるとは思えないほどに広く快適な空間を形作っている。
「フェード、来たよ。なんか見た事ないの連れてるけどね」
ハトルが木の葉の間から下を覗きながら言った。自身も迷彩を施し、完全に周りと同化している。
「フェード？」
フェードが答えないのでハトルはもう一度呼んだ。しかし、それでも応答がない。不審に思って見てみると、
「寝てるし……」
ハトルは溜め息を吐くとナイフを鞘から抜き、フェードのこめかみの辺りにくっつけた。次いで冷酷に言い放つ。
「あと五秒以内に起きないと切るよ」
五、四、三、二……とカウントをしていく。
「一、ぜ」
フェードが飛び起きた。額全面に冷や汗をかいている。
「てめぇ殺す気か！」
「大きい声出さないでくれる？　見つかっちゃうよ」
ナイフを直し、ハトルは顎で指し示した。そしてフェードに枝の間から見るように促す。
フェードは、その完璧な擬装でもって自身を隠している木の葉の

間から下を覗いた。二人の少年少女が歩いている。その横には砂航蟲もいた。
「ふむ……。誰だアイツは」
「さぁね」
護衛でも雇ったんじゃない？　そう言ってハトルは食料を入れている袋からパンを取り出してかじる。
「まぁ、片方がエルフィ・レインコート本人なのは間違いないけど……これは計算外だね。てっきり一人で来ると思ってたけど」
「俺にもくれ。……許容範囲内だ。たかがガキ一匹増えたところで対して変わらん」
パンを受け取り、フェードは豪快に引きちぎりながら食べる。時折パン屑が零れるが彼は気にしていないようだ。
「それはそうだけど、また綺麗にトラップを避けてくれるよ。結構な量仕掛けてあるのに」
「そんだけあいつの運がいいんだろ。ったく、せっかく上等なヤツを使っているんだがな」
半分感心しながらフェードは言う。
見知らぬ少年と、標的であるエルフィは紙一重でトラップに引っ掛らずに歩みを進める。それはまるでハトル達に綱渡りをしているのを見るかのような錯覚を覚えさせた。
「ま、回避されたらされたで帰りがある」

森の中が異様に狭苦しく感じる。
レオルは何か危険が潜んでいると確信していた。禿鷹が追ってきているというのもあったが、それとは違う、気を抜いたら一瞬で命が危険にさらされそうな刺々しい空気が周りに立ち込めている。
一番こういうことに敏感なはずのクロームが反応していないのでまだ安心できるが、これは明らかにエルフィが不機嫌だということだけでは説明できないものがある。

レオルはいつ何があってもいいように警戒を強めていた。
「ねぇアンタさ……」
エルフィが話しかけて来た。この二日間エルフィからの会話がなかったのだが、ようやく話す気になったのだろう。レオルは少し驚いたが、それは顔に出さずに耳を傾ける。
「アンタはこの森になんの用があるの？」
どうやら何を話すか相当迷った挙句の質問だったらしい。話しかけてからの間がずいぶんとあった。
レオルは少し考えた後、その質問に答える。
「んーとね、手がかりの為の人探し」
「人探しって、こんな所で？」
「本当はすぐに済むはずだったんだけどさ。宿で寝過ごしちゃったもんだから」
「なにそれ？」
エルフィは理解が出来ないというように首を傾げる。
「つまり、その手がかりってのが俺が寝過ごしたせいで宿からこっちに移動したのを追ってきたんだよ」
「なるほどね……」
納得、とエルフィはうなずく。
「アンタさてはバカでしょ」
「うるさいな。仕方ないだろ、疲れてたんだから……っと、見えてきた。もうすぐだな」
レオル達の視線の先には、木々の間から見え隠れするウルムズ遺跡があった。

第二章「王の民」5（前書き）

またもや遅れまくりました（汗　しかも短いです。読者の皆様にはなんと弁解すればいいか……。

第二章「王の民」5

――事態は深刻の様相を呈してきている。王の民に遺跡の内部に入られ、任務を完遂されたら今まで我々のやってきたことが水の泡だ。早急に手を打たなければならない。

禿鷹のメンバーは焦っていた。何やら標的である少女に力を貸しているらしい妙な少年が出て来てからというもの、追跡が非常に困難となってしまったのだ。彼ら禿鷹の操る砂航蟲とまったく同じ『強行偵察型』タイプに搭乗しているが、そうとは思えない動きをするのだ。

こちらは脚を鉄製の丈夫なものに取替え、内臓もすべて人口のものにした違法改造のものを使用しているのに追いつけなかった。外見からは改造している所など見つからなかったし、なにより速度では禿鷹の方が勝っていた。

だが、彼らは追いつけなかった。

あと少しというところで、少年は砂航蟲に不思議な動きをさせた。一瞬で、速度も落とさず、方向転換をやってのけたのだ。そのような芸当はなかなかできるものではない。ましてや荷物と少女を乗せた状態で。

とにかく、禿鷹はそれに振り回された。あの少年は要注意だ。

――なんとしてでも、我々はそれを阻止しなければならない。帝国を復活させねばならないのだ。数少ない王の民、そんな卑しい者たちに我々の任務を邪魔されてなるものか。

そして、彼らはついに標的を追い詰めた。ちょうど、遺跡の前で休憩している。

またとない、チャンスだ。

レオルは突如湧き上がった殺気の多さと大胆さに唖然となった。異様に狭苦しかった空気が消えたと思った矢先だった。思わず立ち上がり辺りを見渡す。
「どうしたの？」
なにも感じなかったらしいエルフィが呑気に聞いてきた。
「まずいよ。囲まれた」
「え？」
一瞬にしてエルフィの表情が険しいものへと変わった。すぐさま周りを見渡し、警戒するように立ち上がる。
「まだほんの少しだけ遠いから見ても意味無いよ。それより、すぐに逃げられるように準備してくれ」
そう言ってレオルは休憩のため広げていた物を手早く片付ける。
「少し……って？」
「あと五秒」
一瞬、沈黙が降りた。
「って、アンタねぇ……！」
「来たよ」
レオルは言うが早いか腰に吊っている銃を引き抜く。そしてそれとほぼ同時、盗賊団禿鷹が木々の間から現れた。彼らはまるで獲物を前にした肉食獣のような眼でレオル達を睨み付けた。

「っておいおい、あいつら何処に隠れていやがった。全然分からなかったぞ」
「さぁね」
フェードとハトルはいきなり出てきた禿鷹達に驚きと賞賛の声を

上げた。隠れる事に関してはプロである彼らを凌いでいたからだ。
「禿鷹なんだからこれぐらい出来て当たり前でしょ。盗賊界の頂点に立つ奴らなんだからさ」
「つってもたかが盗賊に出来ていい技じゃねぇぞ今のは」
それもそうだけど。そうハトルは呟く。確かに、盗賊にしては妙な点が沢山ある。今の隠れるという事もそうだし、訓練された動きや普通なら手に入らない武器や砂航蟲を所持しているのだ。
「やっぱり……、元軍隊って噂もあながち間違いじゃないのかもね」
「そうだな。……ちっ、えぐい囲み方してやがんな。こりゃあ下手したら先越されちまうぞ」
木の上から覗き見ているハトル達でも分かる効率的な布陣を禿鷹は敷いている。逃げ道がまったくないのだ。歪な円の形に包囲し、じりじりとそれを狭める。当事者二人は絶対に抜け出せない蟻地獄のような感覚を味わっている事だろう。少女を自分と砂航蟲で庇うようにして立っている少年にも苦々しい表情が浮かんでいる。
「どうする？」
意味ありげにハトルは聞いた。フェードはそれを見てニヤリと笑うとナイフを抜く。
「無論だ。時が来たら助ける」
頷きながらハトルも笑い、自分もナイフを抜いた。

「うん、そう来なくっちゃ」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5701b/

砂航蟲

2010年10月10日03時57分発行